

## 月下の自然：2

Thoreau, Henry David  
Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University

小野, 和人  
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/5442>

---

出版情報：言語文化論究. 15, pp.141-154, 2002-02-15. 九州大学大学院言語文化研究院  
バージョン：  
権利関係：

## 翻訳：月下の自然（“The Moon”）Ⅱ

ヘンリー・ソロー（1817-’62）作・小野 和人 訳

### 11. 夜聞こえる調べ

今私のいるこの人里離れた丘に人の声が聞こえてくる。誰か労働者が一日の労働の後で歌っているのだ。大きな声に違いない。ここから遠く離れているのだから。思うに、きっとそれは教養のある人の声だ。その旋律のある部分はまるで楽器のかなでる楽音のようだ。それに今やさらに遠い所からラッパの音も聞こえてきて、それが私にロマンチックな戦のことを連想させる。数回はなやかな吹奏をしてラッパ手は休息をしに去っていった。月光のもとで私が散歩していて、フルートやホルン、クラリネットや人の歌声による調べを耳にしないことはめったにない。

夜、森の真ん中や丘の天辺で聞く人工の楽の音、かなたの農家からそよ風に乗って運ばれてくるその音はなんとうるわしく、聞く人の心を鼓舞してくれることか。それは人が持ちこたえることのでき、また持つべき価値のある文明なのだ。音楽の調べを聞くためならば私は世界中を歩き回ることもいとわない。思うに人々はこの才能を惜しみながら使っているようだ。人間同士の間では、夕べに聞くフルートの音ほどふさわしいものはめったにないであろう。歌の才能はあるが、その才能を12年間に1回しか使わなかったという鳥がいるとしたら、それを我々はどう思うべきだろうか。ある種の植物は1世紀に1回だけしか花を咲かせないといわれているのだが。

夕べにある人が、村の家並み越しに、半マイルの距離をおいてフルートを吹くのを聞いたことがある — 全ての音色が全くくっきりとしていた。知らせを送る方法としては、火矢を発射するよりもこの方がずっとうるわしいように私には思われた。人類は、世界が始まって以来の長い訓練によってこの芸術を完成に導いた。音を調整する芸術を。そうして野蛮人たちの荒っぽい和声を馴らして大いなる卓越へと達したのだ。

一日の仕事が終わり、今やその労働をした人がクラリネットを吹く。それができるのはこのひとときだけだ。この人は自分のためにセレナーデを奏でる。ということは、この人が心の中でその時間を安らかなものに仕立てるわけだ。彼はこの古式豊かな芸術を練習する。彼の仕事と対比させると、これはなんとという技の達成であろう。おそらくこれは人類の最もみごとなたしなみであろう。酒を飲み、かけごとをする人らもいる。だが、この人はある有名なマーチを演奏する。しかしながらその音楽は、その旋律の中にはなく、その音の一つ一つにあるのだ。それは通商や政治の世界から発するようなものではない。

この演奏者こそ決して昼間見かけることのない人だ。もしこの人がそうだと指摘されても、きっと私は合点がゆかないだろう。でもその演奏は地平線のあらゆる方向で聞けるはずだが。この人はほんの一節だけ吹いてさっさと寝てしまう。けれども、そのたった一節の特徴によって、この人が昼間すごす自分のすごし方にたいそう不満であることがわかる。この人は自分の自由を買い取っている奴隷なのだ。彼は今なお至るところの丘陵でアドミータス王<sup>1)</sup>の羊の群を見張っている太陽神アポロなのだ。そして彼はこの一節を奏でる。自分が天から降りてきたことを自らに思い起こさせるために。それこそが自らを救う手だての全てであり、彼の唯一のあがないの特徴なのだ。それは追想なのだ。彼は若かった頃を思い出したいのだ。彼は高貴な家柄の出身だ。気高い親戚を持つ人だ。それに違いない。幼年の頃にはねんごろに育てられたのだ。今は貧しい作男にすぎないが、何か宝石の指輪をしているとか胸に高価な貴金属の小箱をつけているとか、あるいは彼に高い位を意味する紫衣が託されたというのではなく、まさにあの高貴な旋律を彼は発するのだ。自然の四大〔地、水、火、風〕が彼を認め、彼の奏でる旋律をこだまさせる。ああ、犬たちが彼を知っている。自分らの主人として。もっとも貴族たちや貴婦人たち、金持ちや学者たちは彼を知らないのだが。彼は、国のために尽くした富貴な人、貴頭の子息なのだ。彼は祖先の物語を色々と聞いたことがある。私は、彼が自分の家柄に気づき、その遺産を手に入れ、朝の時間にふさわしい歌を歌うときのことを思ってみた。彼は心中に希望を抱いているのだ。

この人が昼間クラリネットを吹くのを一度も見かけたことがない。

ああそうだ、このプリマス〔ボストン郊外の港、1620年に植民地成立〕の地平線においてさえもアポロ神はアドミータス王のために働いている——この神の別名は「生計(たつき)」なのだ。これがために神話は我々にとって真実で興味深いものとなる。

## 12. 月のランプ

月はこれまでのところ、東の地平線にある広大な雲の土手によっておおい隠されていた。その雲は月よりも早く昇ったようで、一晩中月をおぼろにしかねなかった。

けれども突然月は雲の上に昇った。私がああ暗い雲の土手をもう一度見てみようと思っただけでしばらくすると、その土手は消えてしまっていた。しいて言えば、月の光に照らされて、月の下の空にただ薄いもや状の雲の輪郭がかすかにたどれるだけだ。雲のこのよこしまな見かけをあんなに巨大で恐ろしいものにしたのは、まさにその背後にある月の輝きだったのだ。というのも、その雲は私のみならず月をも威嚇するように思われたからだ——しかし今や雲は消え去り、悪夢のごとく忘れ去られてしまう。

月はこのように自己の危難を自らの光によって拡大しながら現れる。最初はその危難をあらわにし、全く巨大に黒々とそれを見せつけ、大げさにする。ついでそれを背後に投げやり、隠していた自分の光の中にほうりこむ。月は澄んだ空の中を意気揚々と自らの道を

たどって昇っていく。登りはじめは暗い雲におびやかされたが、今は雲の上に昇った月にふさわしいものごしだ。あの黒い貫きえない雲の土手、それは私のあらゆる希望の破滅を示すものかと案じられたが、今やそれは、東の空遠く、かすかな紫色を帯びた蒸気の薄もやのひとはげにすぎない。

およそ我々が勝ちどきをあげ、相手を背後に追放してしまうのは、邪悪という相手に対してだけである。というのも、本当に勝ち誇るのは我々ではなく、むしろ我々を支える幸運の星だということを私は銘記しているからだ。

たそがれが深まり、月光がますます輝きを強めるにつれて、私は自分自身を見定めはじめ — 自分とは誰なのか、どこに位置しているのかについて。まわりの壁がせばまると、私の気分は落ちつき、泰然となる。そして自己の存在を感知する。ちょうどランプが暗い部屋の中に差し入れられて、いっしょにいる仲間が誰であるかを認知するときのように。夜の涼しさとおだやかな銀色の光によって私はある健やかさを取り戻し、私の思いはよりはっきりし、中庸がとれ、和らいだものになる。昼間がすぎ去ってゆく間にじっくりと想いをめぐらせるようになる。太陽の強烈な光は私が瞑想にふけるのをふさわしくないものにし、私を思考の中でさまよわせる。私の生き方が集中力を欠いで、拡散してしまう。決まりきった活動が勝ちを占め、私を支配する。そうなるにとるに足りないことがより大きな力を持つ。真昼時が最強のときとなる。それは24時間中で最もとるに足りない時間なのだが。

太陽はこの世界を外側から照らす。最高天の天空にいて、窓からさしこむ。けれども、夜我々が暗黒の屋根によって包みこまれるときに、月は部屋の中にあるランプのようだ。月は我々のために輝いてくれる。星々自身は、夜によく見え、それがために我々により近く、より親しみのある屋根となってくれる。大自然の偉大なる魂が我々を包みこんでくれるのが感じられる。大自然は、我々の思想の卵を暖めてひなにかえす仕事を太陽だけにまかせているのではない。まるで幼鳥のように我々は大自然の熱を感じ、大自然の身体が暗く我々にかぶさるのが見える。我々の思いは消散することなく、こだまのように我々のもとに戻ってくる。

月は我々を鎮める調停者になってくれる。月は私の目をくらませることのない光の与え手だ。私は月の顔を見つめることができる。月の光によって私は冷静になり、じっくりと考えこむ。それはあたかも、のどの乾いた人に差し出される一碗の冷水のようだ。

月光、それは冷たく、露を帯びた光であり、その光の中で昼間の蒸気が凝縮される。そして大気は夜の闇によって暗くされるが、昼間より澄んでいる。「最良の鏡によって濃縮されても、月光は温度計の上になんら感知されうるような熱を生じない」といわれている。月光によってひき起こされる狂気は、きつと冷たい興奮であり、炎熱の太陽が頭脳に差し生じるあの発狂とはちがうのだ。

月光のもとでは全てが単純なものとなる。事物はおおむねその色彩を奪われ、より真実度の高い検査によって試される。科学は色彩にさほど力点を置かない。夜はいろんな物体がしばしば同じ内容のものに見える。我々は物体の群によって圧迫されることもなく、毅然として身を起すことができる。我々はもはや気が散ることもない。インディアンは夜分に会議をする。月光のもとでは全てがパンや水のように単純だ。芸術の根本原理のように単純だ。それはおそらく日光のさす前に受けるべきレッスンだ。その日光を受けとる準備を我々にさせるためのものなのだ。

### 13. 太陽の弟子

濃く繁った森に入ってゆくと、月光があちこちの木々の特定の切り株や幹から反射しているのが見える。そこら一面が影になっており、反射しているのは銀色の光で、それはあたかも月が照らすべきものを選んでおられるかのようだった。私は急いで前進する。朽ちて燐光を発する切り株を見つけようとして。けれども、それは木々の葉と葉のすき間を通して降りてくるささやかな澄んだ月光だと知れる。どのすき間からくるのか、そう簡単には言えないのだけれど。木陰の中を歩いて森の床にさしこむこの小さな散乱光は、私が今まで見たことのない植物、「月のたね」[コウモリカズラの類]を思い起こさせる——月がその種をこんな場所にまいて植えているかのよう。月のたね、それはある種の植物にふさわしい良い名前だ。

月夜がはじまるのはやっと10時近くになってからだ。人が眠っており、昼間がすっかり忘れ去られているときに、そのときにこそ月影が美しくそそがれる。人けのない牧草地に、ひっそりと牛たちが草を食んでいるところに。そうなれば、この多様な丘陵と谷間の地域へ、私の出番がやってくる。その片側には鬱蒼とした森があり、また雑木林や疎林、灌木の茂みに岩々もあって、木陰をつくるのにこと欠かない場所だ。

この光は、むろん我々が一日中浴びているのだが、それを実感していなかったものだ。それで、より大きな光が去ると、小さな光が実にくっきりと見えてくるのがわかる。今や月がなんと純朴に自然に君臨することか。たしかに月は太陽によってその存在を隠されるが、今や彼女は、太陽を反射し、その代役をすることによってほぼ同等な尊敬と崇拝の念を獲得する。しかも、太陽光にある新たな要素をつけ加え、太陽の弟子がいかに創意に富めるかを示している。さらに真昼時にも、月は、太陽のかたわらにほの白く、雲のようにではあるが、よく見かけられる。午後ときおり、月が東の空高く、満月の3分の2の大きさで出ているのが見える。こうした日中の光景では、ほの白く、つつまじやかな雲のように、幽霊さながらの姿だ。それに月は、反射光だけでなく、自分でも輝くように見える。

ふさわしい弟子とはこのようなものだ。師のいるときにもその姿が見え、ぬきんでた地位を保っている。そして師のいない折りには、師の姿を映し出し、師の代役をつとめ、さらに師の光にある新たな要素をつけ添える。隷属する従者ではなく、師のライバルでも決してない。師が退くと、このほの白い弟子は銀色の光を発しはじめる。暗やみが深まると、

ついに金の色合いを帯びてゆく。けれども、植えたばかりの作物の種を焦がすほどの、また、落ちてきてその種を育ててくれる夜露を乾かしてしまうほどの熱を帯びることも決してない。森林地の小道は昼間と夜では別物だ。もしその小道に少々木々が伸びると、人の目ではその道が見出せず、足まかせで歩かねばならない。ちょうど旅人が馬まかせになるように。

#### 14. 夜の水面

11時だ。私は川の200フィートほど上手の森の中で、崖の上にすわっている。風が吹き、川は休みなく静かに流れている。夜分は、目で見なくても、川でどんな風が立っており、どんな水が流れているかが耳で確実にわかる。その人が川の近くにいるならば。月光は見たところはてしなく続く森から反射されている。

この夜はなんと静かでおだやかなことか。恐れからであれ喜びからであれ、何の叫び声も聞こえてこない。大いなる喜劇も悲劇も演じられてはいない。野生のけもの、あるいは野性的な人の精神からの叫びが聞こえてこないとは驚きだ。コオロギの鳴き声は、最大の音ではなくとも、最も普遍的な音だ。大自然にはフランス革命などはなく、激越さもない。ただ温度が1、2度高かったり、低かったりするだけだ。

私の肩越しに北の方の明かりが見え、それがエスキモーたちのことを連想させる。彼らも、この地球上でやはり私と同世代の者たちで——おそらくアザラシを追いかけながら、この惑星の別な区域を歩んでいるのだ、と。

この崖の高みから4分の1マイル離れた向こうの池、つまり川が広がってできた池の水面を見おろしていると、そこには黄色な明るい光はなく、ごく薄いもやがかかり、池の南西部の入り江に、暗い油状の、ガラスのようになめらかな輝きが見える。こちら側の月に照らされた大気の中には2、3本、松の木が立っているのが目に入る。また水面の月に照らされた部分は、東側の森の水に映る鬱蒼とした木々の影によって区切られている。けれども、この崖からでも、つややかな水草の葉に縁どられ、ジグザグになった岸の線をはっきりと目でたどることができる。

その水の光はたいそう柔らかでピロード状なので、さながら千ものおだやかな昼間の時がその水面にやさしく置かれ、憩っているかのようだ。それによって私はインディアン・サマー [晩秋の小春日和] の日々の正午に（見たことのある、もしくは夢に見たことのある）湖のことを思い出す。けれども、現実のこれは、もっとおだやかで気品のある水面であり、永劫にわたる夏の日々が経過して造り出したさらに高い洗練のすがたを提示している。遠く離れて眺めた夏の日のようだ。これは、より柔らかな彩りで作用する日光の全てが融けあい、さらに水と大気のあらゆるこうした静けさが加わってできたものである。ちょうど11月のある日の真昼に、水面全体が陽光にきらめく1枚のクモの巣状になり、しかもそれが、わたってゆくそよ風に吹かれて、そっと起伏しているようなのだ。ただしこれに

は、月のより清らかな光と、夜のより涼しい気温が作用し、この水面をぐるりととり囲んで守っている夜の深い影が伴ったためだ。

もしこんな光景が最はての原生自然の土地で見られるとしたら、きっとその住民たちがそれを眺め楽しんでいるといえるのではなからうか。

原生林の真ん中にあるこの眺めは神々の所有物だとしても、夜分、さらに、きらめく水のかくも美しい器を添えることを求めるとは、これはいったいどんな神々の意図なのか。神々のわざでなければ、なぜこの美しさが夜に割り当てられたのか——これは夜の領分で輝く宝石だ。あの神々はもう去ってしまった異神たちなのだ。思うにその神々の名前はどんな神話にもでてこない。

夢を見ているときのようなほほえみが、この眠っている池の面に浮かんでいる。

それは、はるかかなたの、経過して久しい文明のことを、時間を超克し、時間では計れない昔のことを語っている。それは自然の中にある確かな洗練であり、文明ではあるが、野生と共存し、野生によって強まるもの——つまりそれは、夜の中にある光のことだ。といっても、それが明かりの乏しさを私に認識させるのではない。我々が目にするもの、言い換えれば、夜が我々に提示したがっているものを見せるには十分な光があるのだ。それ以上の光があれば、こうしたものがかえって不明瞭になってしまう。

池にそそぐ小川の音が聞こえる——私の五感にとって言いようもないさわやかさだ。まるで私の骨を伝って流れるかのようだ。私の心は、飽くことのない乾きでもってその音を聞く。それは心の砂地の熱をしずめてくれる。

それは私の体内の循環に作用する。思うに私の動脈はそれに共震している。それは、私が血液の循環の中で聞く純粋な落水の音——私の心臓に落ちる流れの音に他ならないのではないか。昼も夜も変わりなく流れるこのコボコボという水音は、私の体内のあらゆる攪拌器に落ち、あらゆる水おけを満たし、私という水車の水受け板を水にひたし、心身の全装置を回転させ、私を大自然の源泉へと導く用水路にする。こうして私は洗われる。こうして私は飲み、乾きをいやす。

その流れが池に落ちる音は散歩者全てに聞こえるはずだ。もし散歩者たちの位置がほんの数インチ高められるならば。

今私が丘を下ってゆくとき、北側の光は、噴き上げる短い炎を上のにせた三日月形の光に——もしくは炎の影になった。というのも、その光はときおり白く、また黒っぽくなったからだ。

今やその北方の火はみごとに広がってゆく。噴き上げるというよりもむしろ這うように

進みながら。夜遠く離れて見える北方の山並みの火事のように。極北のかなたの神々が藪の茂みを焼いているのだ。その火が広がり、天にある農具の鋤を全て用いても、それを消すことはできないのだった。その火は三日月形の丘を越え、西から東へ広がった。巨大なホタルのようにそれは北の空をよぎっており、数多くの火の粉にちぎれ、その1つ1つが空の周りをめぐって虹色に輝き、東の方をさして懸命に進もうとする。虫のように、己自身の環状の筋肉を使って這いながら。その火は神々の最良の植林地へと広がった。今やその火が1つぽつんとしたかがり火のように、それとも、燃えている灌木の茂みのように噴き上げる。あるいはその火が、導火線のように松の木をかけのぼり、その箇所では炸裂する。それでいて火は、燃えている油分の多い切り株のようにあちこちできらめき続け、水面に反射している。以上は実は私の幻想にすぎないのだが、この幻想は、私が大地にもものが燃えた臭いをかぎとることによってより完璧なものとなった。今や私には神々が大いなるみわざをふるい、その火をとりおさえたことがわかる。そして星々は何の恐れも抱かずに輝き出たのだった。

（コナンタム<sup>2)</sup>の）岩が多いむき出しの丘の頂で、しばらく（林の影の中に）すわり、月に照らされた野原を見はるかす。白い岩々は昼間よりもくっきりとしている。

今大気は岩よりもあたたかい。大気が申し分なくあったかなので、できれば一晩中ここにとどまり、夜が明けるまで夜の現象の1つ1つを全て観察していたい気持ちにかられる。でも、もしそんなことをしようものなら、町中の人らがかかり集められ、私を捜索することになるだろう。ここの尖塔形の岩の上で、私は冷気も感じずに横たわっている。自分の目と星々の間には何のさえぎるものもなく、ただ空間があるのみで、あをむけになっている。あの星々が、天の側における最も近い我が隣人たちなのだ。こんなありさまを想像してもらいたい。その星々が私にとってなじみがあるとなかろうと、また別世界の存在であろうと、単に大地にとっての飾りものにすぎなかりょうと、それはさしつかえないのだが。こんな状況のもとでは誰が眠りにつけようか。

私は北極地方の住民たちのことを思う。というのも、私には、この地球上の最も近い人らと同様に最も遠い人らにも縁があるように感じられるからだ。オズボーン<sup>3)</sup>は、彼の北極日誌の中でこう述べている。

「こうした北極の動物たちと共に住民たちも、もっと南の風土における場合と同様に、規則正しく身体を休めるために寝につく。太陽の近くに重々しい雲の土手があり、それに天空の落ちついた色合いが加わり、北極の夜に快適さと共にきわだった静けさを与えてくれる。」

私がここにすわっていらい、1つの明るい星が木の幹の背後に隠れてしまった。それは私の体内時計が動いていることを表示してくれる。私にとっては、循環する時計の振り子よりもよくそのことを証明してくれる。

そして今やその星があの木の前側に現れている。それで私は去らねばならない。

ここには依然として露が生じていない。リンゴの木に鎌が3つぶらさがっているのが見える。

## 15. 月と雲の戦い

一時半に起き立ち、注意してそっと歩み出てゆく。家族の者たちの妨げにならないように。やはり注意して通りに入る。隣人たちを妨げないように。へいを乗り越えると初めて自然に自由に歩けるようになった。それから川に行つて水浴をした。その後、3マイル先の弧丘へ進んでいった。

世の中と世のいとなみは全て休息させられている。私は何の前置きもなく、ただちに深夜の中に踏みこんでいた。その中を通してゆくのかすかな明かりもなかった。

このような晩、見たところ月が雲の中をよぎっていく際の絶え間ない動きがあり、それを見物することは旅人にとってなんという悦楽であることか。その人がすわってしようと立ってしようと、月の動きは常にその人にとって新たな展開を準備してくれる。それは月光の夜のドラマであり、すなおな心の持ち主にとっては十分な催しごとだ。その人は全く一人で、月も一人ぼっちで、森や湖や川の上で、山並みの上で雲の全艦隊と戦い、絶え間なく勝利を収めてゆく。月が次ぎにどの雲を相手にするかは必ずしも言えない — 雲の中をたえず踏み渡ってゆくのだが。月がこちらの雲によって陰らされても、もっと遠くだがより低い雲の上では輝いているのが見える。月は雲に対してなんと数限りない遭遇をしていることか。

人は月の運命を決して予言できない — 今から30分後、月が雲にうち勝つか、それとも雲に陰らされるかを。月はあらゆる予想を無にするだろう。月自身の光が、近づいてくる雲に影を造り出し、月の見かけの運命を誇張する。

月が陰らされると、私は月に対する同情のあまり、その救いのために犬をむち打つこともできるほどだ。インディアンたちがそうするように。

月が明るく妨げもなく輝いているか、それとも曇らされているかは、寝床で眠っている人には無関係だが、旅人にとっては非常に重要なことだ。月がなんの妨げもなく輝き出すとき、大地全体が表す晴れ晴れとした喜びを人が実感することは容易ではない。その人がしばしば夜間外出をしたことがないのならば。

旅人の月によせる共感、ただよう雲のドラマを言いようもなく興味深いものにする。月は旅人の案内人であると共に唯一の同伴者でもあり、それで旅人の想いは全て月に集中される。彼の仕事の全ては、どの雲が月のはげましの光を遮断する運命にあるのか、どの

雲に月がうち勝つだろうかを算定することだ。月は旅人のために雲たちと絶え間ない戦いを行なっている。どの雲が次ぎに月の取り組み表に入ってくるのだろうか。月は旅人のめぐらした想いを採用する。月が天空の大いなる範囲の晴れた領域に入ってきて、なんの妨げもなく輝くとき、旅人は喜ぶ。そして月が、敵とする雲のあらゆる艦隊と戦いつつ進んでゆき、痛手を負うこともなく、堂々と澄んだ空に昇り、その通り道にはもはやなんの障害物もなくなるとき、旅人は愉快げに、自信を持って己の道をたどり、その心は喜びに満ちる。コオロギもその歌に喜びを表しているようだ。でも、もし月が戦うべき多くの新たな雲の群を持っているのがわかると、旅人はむっつりと進んでゆく。失望し、不満を抱く人のように。旅人はそのことを自分自身にとっての侮辱のようにいらいらだつのだ。

このように私は、人けのない月に照らされた夜の中に出てゆく。まるで、昔人々が住んでいたが、今では見捨てられた情景の中に入りこむように。その人らの人生は私にとって夢のようなものだ。夜がその場を所有していらい3千年がたったのだ。深夜出かけていってコオロギのうたうのを聞いてみたまえ。そして彼らの王朝が古いもので、しっかりとうち建てられたものでないかどうか学んでみたまえ。夜はたしかに自己の領域をとり戻しているのだ。あたかも夜の王朝がとぎれなく続いているかのように。あるいは、昼間の基盤を築いてやったのが夜であるかのように。樹木のもと、ほの暗い光の中に立っている農家と納屋のそばを私は通ってゆく。そうした農家がとても遠くに位置しているか、またはヴェールに包まれているかのように感じながら。その農家の人らと雄牛たちは皆眠っている。この全世界に人けが薄くなっている。ニューイングランドの農民年鑑が関心を示すその対象は、今や異なる次元に属しているのだ。

## 16. 夜の哲学

人は哲学者のことをこの世界の見物人だと言うかもしれない。哲学の極度の高みに立っている人にとって、人類とその営みは、しばしばその視界から沈んでしまうことだろう。全く人間は、あまりにもその存在を主張されすぎているのだ。ある詩人 [英国の詩人アレクサンダー・ポープ (1688-1744) のこと] の言では、「人類の正しい研究対象は人間」である。でも私は言う、この世界についてもっと広い視野を持て、と。あの詩人の言は、人類の自己中心癖によるものだ。主に出版業者らが牛耳っているあの子供じみたゴシップ的な社交文学のことを思ってもみたまえ。別な詩人<sup>4)</sup>の言によれば、我々にとって世事が多すぎる、とのことだが、むしろその真意は、我々にとって人間の要素が多すぎるということだ。人間についての公表された所見、諸々の制度や世間常識の中には、狭量さや妄想が入りこんでいる。人類愛の美德をあんなに誇張し、それを人間の属性の最高のものとするのは、我々の自己偏愛のなせる業なのだ。遅かれ早かれ世の中の方が成長し、人類愛やそれに基づくあらゆる宗教をしのいでしまうだろう。そうした宗教が久しく我々の精神を維持することはできないだろう。妄想にとらわれないようにするためには、ときに人がそれをやり過ぎ、その人の存在が砂粒ほどでしかない宇宙をながめるようにしむけたいものだ。たしかなことだが、私のいろんなもの思いの中で、社会との、また人とのつながりと共存し、共時している発想は、たとえそれが人情味のあるおだやかなものであろうとも、それ

が最も賢明で最も普遍的なものではないのだ。村、都市、州、国家、つまり文明世界——それが哲学者に大いに関心を持たせるとはどんな意味においてなのか。むしろそれは巢ごもるのに快適な場所のことであり、そこに我々は心のかような友人たちや炉辺を持っている。にもかかわらず私は真夜中に起きあがりさえすればよい——昼間私が、自分の思考の中でちょっとばかり飛翔したり彷徨したりするためには。みんなが眠りこんでいることを認識するためには。我々の文学をみたまえ。読者の共感を求めて、なんとという貧弱な、ちっぴけな、おつき合い的な内容であることか。作者自身が読者たちへの気使いで思い悩んでいる——自分が死ぬまでになんとか読者を一人でもものにしたいというわけだ。

この世で我々がおたがいを汚し合うことに甘んじるのではなく、皆が共に天国に至れるようにしたいものだ。良き人であるということは、良き市民であり、良き隣人であることにほかならない。人類というのは巨大な団体だ。それはたいていの者たちが所属している共同体だ。そのことに関してだが、以下の問いは、私が仲間の者に試してみたい一種の試験問題なのだ。「この人は人間を忘れることができるだろうか。この世界が眠っていることを彼は見届けることができるだろうか。」

宇宙観といっても、それに人間や人間のいろんな仕組みのことがただちに、しかもかならず入りこみ、世の広範囲な注目を集めるような、そんなたぐいの発想を私は評価しない。人間とは私の立っている足場にすぎず、そこからの展望ははてしがたい。この世界は私という存在を映し出す鏡の間ではないのだ。私がものを考えるとき、私の中に私以外の他者がいることに気づく。哲学にとっては、私とはすでに過ぎ去った現象にすぎないのだ。宇宙は人間の住居としては大きすぎる。世の中にはめったに戸外にいかない人々がいる。大半の人らは夜常に家にいる。その生涯でただ一度でも一晩中野外にいたことのある人は本当にごく少ない。人類の世界の背後にまわり、人間のいろんな仕組みのありさまをまるで路傍のキノコのようにながめたことのある人はさらにわずかである。

人間とそのあらゆる関心の対象をその中に封じこめてしまえるような円を描きたいものだ。その円の外では、人はとらえどころのないものとなるだろう。哲学者とは、この円の外側を歩み、人間を地平線における一現象にすぎないと見なしうる人だ。

## 17. 夜明け前の音

時計が3時を打つのが聞こえる。

オリオンの帯のところの光が夜空を貫いて我々の方に至るのだが、その光は昼間の青空のなごりを示しているかに見える。そちらの側の空は少なくとも西側の方よりも明るい。月の出ている付近よりもである。夜間でさえも、空は黒ではなく青いのだ。というのも、我々は地球の影を通して遠く離れた昼間の大気をのぞきこんでいるからだ。私は、太陽が支配し、その光線たちが浮かれ騒ぎをやっている昼間の広い平原のことに思いを馳せる。

この遠く離れた丘の頂きから、農夫が馬に鞍を置き、遠い市場へと出発するもの音が聞こえる。けれども、自分自身に鞍を乗せ、もっと価値のある企てに出発する人はいない。雄鶏の一鳴きが農夫のすごした全生涯を物語る。

修繕中の橋の横けたの上にはすわっており、今3時半、雄鶏の鳴き声が聞こえてくる。その音はなんとみごとに夜明けに調和していることか。それは暗やみをひき裂く陽光の最初の矢によって造られたかのようにだ——太陽の車軸の散乱する音が、もうすでに東の丘陵を越えて聞こえてきたのだ。

人間の一生はいやしくてとるに足らないものだが、自然は神聖で英雄的だ。なんという限りない信頼と約束と穏和さでもって新たな一日一日がはじまることか。

そして今や朝の最初の兆しが旅人の注意を引きつけ、旅人は喜びを示さずにはいられない。それに月は次第に彼の記憶から薄れはじめる。風が立ち、雑木林をそよがせる。

時計が4時を打つ。

2, 3匹の犬が吠える。さらに2, 3の荷馬車が市場へ向けて出発する。そのかすかなガラガラという音が遠くに聞こえる。そして私の飼っている名もないフクロウの声、ゆっくりと近づいてくる貨物列車のとどろき、それはおそらくウォルサム<sup>5)</sup>の町あたりの距離であるが。それに早起き鳥の一羽の声。

丸い赤い月が西の方に消えかけており、東の方には白い色が現れているのがわかる。その頃までに西の方から暗いどっしりとした雲がいくつかやってきた。まるで近づいてくる太陽にひき寄せられたかのように。そしてそれが、東の空の入口のまわりに放射状に並んだのだった。太陽の現れるのを防がんとするかのように。雲たちは、突然、ほとんど気づかれぬままに、西から東へ、全く空を横切って動いたのだ——その前は空が晴れていたのに。やってくる夜明けをすみやかに迎え撃つべく、西の軍勢のこの暗い集団を配列させ、前進させるためのラッパは聞こえてはこなかったが。人々がまだ眠っている間、この強大な西軍は、空をよぎって次々と雲の縦隊を送り出したが、全くむだだった。

東の地平線は今や焦げ茶色になり、夜の前衛部隊がすでに太陽の先兵隊と小ぜりあいをしている箇所を示していた。赤く輝く光がそこの大気を染めつつあったが。一方、暗い柱状の雲が、その輝きに触れることもなく、幅広い空の玄関にさしせまるようにかかっている。

カッコーが一羽頭上を飛び、子犬の吠えるような音をたてる。まだとても暗いので、私はとり落とした鉛筆が見つからない。それで、それが見えるほど明るくなるまでに30分間そのままだった。

岩の多い丘の頂きに立っていると、ついプファイファー夫人<sup>6)</sup>の冒険のことが思い浮かんでくる。夫人がメソポタミアのモスール<sup>7)</sup>からロアンダス<sup>8)</sup>へキャラバンの旅をした際のことである。その道は山の峠を抜けており、その峠で、一行は、自分たちが動かした石が深淵へ転がり落ちていく轟音を聞いたのだった。

夫人の話では、「私たちはこうして一時間ほどの間進んでゆきました。すると月が突然厚い雲におおわれてしまい、あんまりまっ暗になったので、ほとんど一寸先も見えませんでした。案内人はたえず火打ち石を打って、その火花によってゆく手が見えるようにしてくれました。けれどもそれでは不十分で、動物たちはつまづいたり、すべったりしはじめました。やがて次々と立ち止まり、朝までじっとしている以外に方法が無くなりました——まるで私たちが突然石に変えられたみたい。それでも、夜明けの光によって私たちは再びよみがえり、元気よく馬を駆りたて、ほどなく、形容できないほど美しい山並みの輪の中に入っていったのです。」

列車がゆっくりと近づいてくる音はにわかに起きる風の音に似ている。最初私は朝の風が立っているのだと思いこんだ。

今やたぶん4時半で、どこか遠く離れた工場の鐘の音が聞こえる。工員たちを仕事に呼び起こしているのだ。ここではそれがとてもきれいな音にひびく。きっとそれは、私が1度も訪れたことのない谷間にあり、1度も見かけたことのない工場なのだ。けれども今聞いていると、それはまさに美しく感銘深い朝祷の鐘で、聖人たちや聖なる乙女たちを礼拝に呼び出しているかのようで、工場の娘たちや職人たちにとるに足らない労働を再開させようとしているのだとは思えない。それはなにか宗教的な、もしくは詩的でさえある共同体の呼び出しのようで——遠くの谷間に住んでいるなにか神聖な共同体、たとえば気高い騎士団の朝の祈りの鐘であり——こうして彼ら自身の朝の思索と調和し、遠く、広く、うるわしく、ひびきよく鳴っているのだ。この大地とこの時間にこれほどふさわしいものを他に想定できるだろうか。高い決意と献身的なたましいの持ち主がその鐘のひもに触れて、そのとどろきによりその人の仲間の修道士たち、修道女たちが安らかな眠りからさめ、かぐわしい朝の思索をはじめめるのだ。それがアサベット<sup>9)</sup>における騎士の工場の鐘だということをはばからねばならない理由があるだろうか。何回か耳ざわりのよいひびきがあり、それからまたあたり一帯が静かになる。

## 18. 昼という名の夜

私が夜の大半を外の月光の中ですごした後は、翌日の夜、もしくはたぶん翌日の昼間、その埋め合わせをするために多めに眠らねばならない——古代の人々が述べたように、「エンディミオニス、ソムヌム、ドルミーレ」(エンディミオニ的な眠りをする)が必要だ。でも、このように昼間を夜に置き換えることによって得るものがある。エンディミオンは大神ジュピターから望むだけ常に若くあり、眠っておれる権利を獲得したといわれている。誰もが眠りを恐れないようにさせたい。もしその人の疲労が自己の天分に従うこ

とから生じるのであるならば。夜分でさえも、その人が床につく権利があるかどうかは、その人が昼間をどのようにすごしたかにかかっている。だから、自分が日光の中で眠る権利を持てるように何時間かをすごしなさい。神々と夜をすごした者は、昼間ふつうの労働によって疲労した者が夜眠るのと同じくらいくたくなく眠るのだ。

カトー<sup>10)</sup>いわく、「犬たちは昼間は黙していなければならない。夜分もっと鋭敏（アクリオーレス）で、もっと猛々しく、不寝番がもっとよくできるように。」月や星の観察者についても同じことがいえるだろう。

その種の生活では、実は眠っていないながら、自分たちは目をさまして生きているという夢を見るわけだ。というのも、夜間の散策では目をさまして生きており、一方昼間の生活は夢としてのように思われるからだ。

けれども大自然は、人が夜間あまり外出すべきではないと定めているようだ。太陽の光に比べて月の光がかすかで乏しいことで、月はおそらく人間に対する月自身の意図を表明しているらしい。たぶん月は、ほんの時たま、森羅万象を夜間ながめるようにと人を誘いだすために輝くのだ。けれども、やがて、昼間の方が労働にとってふさわしい時間帯だと人に警告するために欠けていくのだ。

我々が年齢を重ねるにつれて、朝についてよりも夕べについて言うことが多くなるというのは不吉なことではなかろうか。我々はもっと早い時間につき合わねばならない。

私が、月光についてと同様に日光についても書いてはいけないうけがあろうか。少なくとも月がその三日月形を見せていないおりに、私が太陽をながめてはいけないうけがあろうか。

もし万一、我々が、夜の場合と同じような放心状態で、とはいえ同じほどの公平無私な観察と批評の能力をもって日光のもとを歩くとしたらどうだろう。それも、陽光が我々のために輝くのではなく、あたかも我々の方が自主的に陽光を賞賛する目的でその中に立ち入ったのであり、いかなる仕事も我々の気持ちをそこからそらすことはありえないというふうにある。月光のもとでは、我々は世俗的な土臭い大地の産物ではなく、霊的な気高い大地の申し子である。だから我々は、太陽を月として、かなり薄い光、つまり反射光にすぎないものと見なし、昼間を、まだいくつか星々を一べつすることができ、薄暗がり支配する夜として受けとめながら、日光のもとを歩くことができるかもしれない。もしやってみるならば。

（完）

## 註

- 1) ギリシャ伝説におけるテッサリアの王。金の羊毛を目指したアルゴ船の乗組員の一人。
- 2) マサチューセッツ州のコンコードでソローが一時住んだウォールデン湖畔の南西側にある地区の名。
- 3) Sherard Osborn (1822-’75) イギリスの海軍士官で探検家。北極探検中に行方不明になった Sir John Franklin の搜索のため、2回 (1850-51, 1852-54) 北極圏への航海をし、指揮をとった。
- 4) 未詳。
- 5) マサチューセッツ州の町でボストンの西方にあり、時計の生産地。人口4万7,000人。
- 6) Ida Laura (Reyer) Pfeiffer (1797-1858) オーストリアの旅行家。1842年来日。*Meine Zweite Weltreise* (『私の2回の世界旅行』) 等の紀行書がある。
- 7) イラク北部、ティグリス河畔のニネヴェの廢墟の対岸に位置する都市。人口26万5,000人。
- 8) モスールの東方にあり、イランとの国境線に近い小都市。今日の綴りでは Rawandiz。
- 9) ソローの郷土コンコードを流れるコンコード川の上流は、アサベット川とサドベリー川である。そのアサベット川の流域の区域。
- 10) マルクス・ポルシウス・カトー・センソリウス、通称大カトー (前234-前149) 古代ローマの将軍、政治家、文人。コンスル (執政官) 等を勤め、雄弁家で質実剛健な氣風を広めた。ラテン散文文学の祖と言われる。